

東京にて、家族を想う

イシワタマリ／美術家・山山アートセンター

新幹線の中で慌てて用意したスライドをいざ会場で開いてみたら、私がふだんのプレゼンで欠かさず入れているはずのいちばん肝心な写真がごっそり抜けてることに気づいた。（それらはわざわざ後生大事に別フォルダに分けてあったがために開かなかった。）「東京でつくる」にまつわるこれまでの流れを追っていたら、自然とそんなことになってたのよ。

あなたのハートの奥のほう、今のあなたがよりどころとしているような「軸」は何か？それはとても個人的な話に違なくて、わざわざ公にさらすような話じゃないはずで、こんな話をしたら場の空気に変な感じになっちゃうはずで、「まっとうな大人」のあなたは、深い深い海の底、鍵をかけて鎖でぐるぐる巻きにして、たいそうな宝箱の中に大事に大事にしまっているかもしれない。大切だから開かない。今日のところはとりあえず、それをそのまま開かない。今日のところは。今日のところは。でもそうしているうちに、人は歳を重ね、老い、忘れ、死んでしまう。

公衆の面前にトラウマを晒せ！と言っているのではない。ひみつの宝箱の鍵をこじ開けろ！と言っているわけでもない。ただ、一度きりの人生、あなたが何に引っかかっているのか、何を大切に生きていきたいのか、せめてあなた自身には気づいてほしいし、あなた自身が触れたいときにはいつでも手にとって触れられる場所に置いてほしい、なんならそれを両手に抱きかかえているときのあなたの顔を私にも見せてほしいと思うのである。

私は今回、石神夏希さんと嘉原妙さんと吉田雄一郎さんに逢いたくて来ただけで、「東京でつくる」とかといったことは正直ちょっとよくわからないのだよ（だって東京でつくってないし）。でも終盤になって井上知子さんが「石神さんが神奈川と東京を明確に分けているのはなんでなんですか？」と問うのに答えるかたちで石神さんがボソボソと喋り始めた個人的な物語を聞いて、私はようやくたいせつな物語の片鱗に触れる。夏希さんはやっぱり私にとってピンと来る人だし、夏希さんが東京でつくること、そして東京でつくることに戸惑っていることにやっぱり意味があるのだと思う。

物語はいつだって個人的なものだ。個人的でしかあり得ない。

人はみんな、いつかは必ず死んでしまう。私もあなたも、私やあなたが愛する人たちだって、最後には必ず死ぬのだ。だから、愛するものを日々愛そう。大切なものを大切にしよう。大切だからこそ開かずにいるその箱は、あなたが生きている日常の中で開かない限りはほかの誰にも開くことができないのだ。

私はいつまでたってもプレゼンが下手で、いつも物を落としたり物を無くしたり、いつもひとりでブツブツ呟きながらキョロキョロしているような人間で、特技は地雷を踏むこともしくは新しい地雷を埋めることなので、35歳の2児の母としてはそこそこの日常に支障をきたすことがあるのだが、山山アートセンターは私がそういう人間であるというところからスタートしているので、常に個人的な話をさらすことから始まる。

私はとにかく人間が好きで、もっというなら自分と他人の区別がつかなくて、他人の影響をもらって受けてしまうことが多々あって、人間関係に翻弄されながら流れ流れてここまでやってきた。そんな私にとって人生最大のできごとは、結婚したこと、出産したこと、そして新しい家族を持ったこと。自分には帰るべき家がある、と思えることで、それ以外のものに翻弄されて流されゆくことが格段に減った。

どうすれば妻とか母といった斬新な肩書きを持ったまま私なりに生きていけるのか・・・という個人的な戸惑いから始まったものの、最近活動の幅が広がってすっかり忙しくなり、週末に家族をないがしろにすることが増えた・・・（たとえば今週末のように）。そしてそのことで家族ともめる場面も出てきた現実・・・。バ・ラ・ン・ス・っ・て・だ・い・じ・よ・ね！人生続くよ、死ぬまでずっと。毎日がトライアンドエラー。だけども家族という枠組みを失えば、アートもプロジェクトもへったくれもなくて、自分がどこに軸足を置けばいいのかわからなくなってしまわずなのである。山山アートセンターはこれまでの人生の100万回以上にわたるトライアンドエラーのリベンジであることに加えて、何よりも家族がいて初めて成立しているプロジェクトなのである。

東京にやってきて、自分の帰るべき家と家族を想う。夫のお弁当と週末の子どもの着替えを渡して出てきたけれど、私は彼らを大切にできているだろうか。あるいは、そもそも私が横浜や東京から離れたいと願ったいちばんの理由でもある、愛すべき父や母を。

・・・生きよう、大切なものを大切に生きて、今日も明日も明後日も。